

「周年事業」にみる100 周年の軌跡

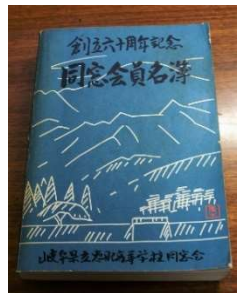
渉外委員会

恵那高等学校創立 60 周年は昭和 57(1982)年に迎えました。記念式典こそ行われませんでした。ソフト・ハードの両面で今も残る事業が多くありました。「創立 60 周年記念同窓会員名簿」より、お 2 人の巻頭文の一部をお借りして 2 大事業をご紹介します。

同窓会名簿発刊に寄せて 同窓会長 伊藤源紀

(前略)

同窓会としましては記念事業として当初に校門の建設と同窓会員名簿の刊行を計画して会員の皆様方に御協力をお願いしましたところ、多大の御支援をいただき、この双方とも予想どおり所期の目的を達成し、しかもお寄せいただきました多額の基金の剰余金にて当初計画に含まれていなかった、校門から東へとつづく庭園をも完成することができました。(中略)



60 周年記念同窓会員名簿

さて、少しばかりこの同窓会員名簿のことについて申しあげてみたいと思

いますが、そもそも昭和 47 年に創立 50 周年を祝いました時に刊行しました名簿は、母校開設以来初めてのものです。計画から発刊までに悠に三年有余の歳月を必要と致しました。そのかげには同窓の諸兄姉、先生方、生徒諸君のなみなならぬ御尽力があったことを忘れることは出来ません。殊に母校は昭和 37 年 8 月不慮の火災に遭い、学籍簿の大半を焼失してしまいました。卒業年次の古い方々については各回別に新たに調査を



校歌碑は 1 棟西入口前へ移動



今も残る並木と石畳

開始していただく一方、めまぐるしく変わる卒業したての高校生諸君の住所や勤務先等についても出来得る限り方途を講じて不明者がいないよう努力致しましたが、残念ながら結果的には十全のものとはなりませんでした。しかし、その名簿が出来ていましたおかげで、今回の名簿作りはいわゆる雲をつかむような段階から出発しなくても済み、また前回同様、同窓会役員の方々をはじめ会員各位、先生方、生徒諸君の力強い支援体制の下で着々と進められ、比較的短期間で上梓の運びとなりましたことを大変うれしく思いますと同時に、献身的と申してよいほど御協力下さいました方々に改めて厚くお礼を申しあげます。(後略)

創立 60 周年に当り 学校長 渡辺浩光

(前略)

草創以来半世紀の激動にみちた本校の歴史は、さきに創立 50 周年記念事業の一つとして発刊された「城陵誌」に詳しくその苦節と栄光の跡をたどることが出来ますが、その後本校は更に 10 年の年輪を積み重ねたわけであります。

この 10 年の間に、本校は全日制課程において普通科 2・理数科 1 の学級増をみ、東濃東部における中心的な大学進学校としての特色を益々発揮しながら、現在では、定時制課程 40 余名を含めて生徒総数 1080 余名を擁する大規模校に発展しました。この間に本校が送り出した卒業生

数は凡そ 3170 名を数えます。10 年の歳月における従来の同窓会員諸兄姉の住所・勤務先等の変動もまた数多にのぼるものと推察されます。(中略)



竣工直後の校門及び庭園

なお、同窓会におかれましては、会員名簿の発行という大事業のほかに、さらに母校のために 60 周年を記念する特別後援事業として、募金による校門並びに本館前庭園の改築整備事業を企画され、校門は 5 月庭園は 12 月にそれぞれ完成、母校へ御寄贈いただきました。白主独立の志を尊ぶ本校の歴史と伝統にいかにもふさわしく、厳然として荘重に立つ校門と整然として格調ある庭園は、今後、この門をくぐりこの庭を通して学ぶ若者たちに誇り高き城陵の精神と勉学への志を末代にわたって語り伝

えてくれるものと信じます。同窓会員皆様の母校に寄せられる熱いお志に対しては、学校としてまことに感銘にたえないところであり、さきにも同窓会報を達じて御挨拶申し上げましたが、改めてこの誌上をかり深く感謝申し上げる次第であります。(後略)

60 周年を前にしてこの他に下水道への排水切り替え、第 2 体育館建設を初めとする多くの施設設備工事が行われました。

一方、50 周年以降の記録をまとめた「城陵」が発行、その刊行経験から年ごとの学校の歩みを記録する重要性が反省され、校誌「恵華」が復刊されました。昭和 17 年 1 月 30 日発行「恵華」16 号で閉じられ、昭和 22 年 12 月 17 号で復刊するもまた忘れられかけた「恵華」それが昭和 58 年 7 月に校誌として復刊、その後 40 年近くに渡りその時折の学校の様子、生徒の論説などを記して今も発刊されています。



恵華復刊 1 号から 10 号まで



60 周年を記念して作られた庭園、国旗掲揚台（写真は「60 周年記念同窓会員名簿」の扉・中扉に使われたものより）